

まゆだま通信

News Letter

文部科学省 女性研究者研究活動支援事業

■発行
 国立大学法人群馬大学
 男女共同参画推進室

〒371-8510
 群馬県前橋市荒牧町 4-2
 TEL:027-220-7146
 FAX:027-220-7143
 mail:kyodo-sankaku@jimu.gunma-u.ac.jp
 HP:http://kyodo-sankaku.gunma-u.ac.jp/



2016.2

vol.10

群馬大学女性研究者研究活動支援事業 シンポジウム

「女性力＝未来力2

ジェンダー・イクオリティ

－戦略としての男女共同参画－

平成27年11月27日に「まゆだまプラン」(群馬大学女性研究者研究活動支援事業)開始後3回目にあたるシンポジウムをミューズホールにて開催しました。事業最終年度でもある今年のシンポジウムは、男女共同参画を組織の戦略として生かすという視点からの講演とパネルセッションの二部構成で行いました。

平塚浩士学長の開会挨拶の後、工藤貴子男女共同参画推進室長から群馬大学の女性研究者支援に関する取組紹介がありました。続く前半の部は、先進的な男女共同参画の取組により組織活性化に取り組んでいる大学や企業から多彩な講師を招いての講演でした。名古屋大学副理事の東村博子氏による「女性の活躍で大学を活性化－名古屋大学の取組を中心に－」、株式会社資生堂研究推進部総務室長の石館周三氏による「女性の活躍をサポートする－特に理系－」、三菱マテリアル株式会社電子材料事業カンパニープレジデント補佐の駒田紀一氏による「米国における製造現場管理職への女性進出の現状－1企業の事例－」と題した3講演はいずれも群馬大学での今後の取組に大いに役立つ示唆に富んだものでした。

後半のパネルセッションでは「女性の活躍が組織にもたらす効果」と題し、お招きした3人の講師に加えて、平塚学長、工藤室長、長安めぐみ男女共同参画推進室講師がパネリストとして登壇し、男女共同参画推進が組織運営の起爆剤となるなど、経験を踏まえたメッセージが熱く語られ、活発な意見交換の後、盛会のうちに閉会しました。



研究活動支援制度利用者による 研究成果ポスターセッションと情報交換会

今回もシンポジウム終了後、会場外のホールにて、研究活動支援制度利用者による研究成果紹介のポスターセッションが行われました。20名の研究者がポスター展示と発表を行い、シンポジウム参加者からの質問に答えるなど、貴重な交流の機会となりました。最後に、シンポジウム講師の方々を囲み、大学幹部、本事業に関わった男女共同参画推進室員や関係者、研究活動支援制度利用者などで情報交換会を開催しました。



第3回まゆだま会 全学ランチミーティングを開催

文部科学省女性研究者研究活動支援事業「まゆだまプラン」の一環として、第3回まゆだま会全学ランチミーティングが平成27年12月22日（火）に昭和キャンパス生体調節研究所会議室にて開催されました。このランチミーティングは女性教職員、女子学生がキャンパスや学部の垣根を越えて交流し、ネットワークをつくることを目的としています。年末の慌ただしい時期にもかかわらず、第3回となる今回は学生7名を含む37名の方にご参加いただきました。

男女共同参画推進委員長の和泉孝志理事からの開会挨拶の後、峯岸敬医学系研究科長、村上博和保健学研究科長、泉哲郎生体調節研究所長よりそれぞれご挨拶をしていただきました。その後は立食形式で軽食をとりながら自由に交流を楽しみ、また会の中盤では参加者全員に簡単な自己紹介もしていただきました。最後には工藤貴子男女共同参画推進室長より「まゆだまプラン」での取り組みの紹介と閉会の挨拶がありました。和やかな雰囲気の中で会話が弾み、あっという間に予定の1時間が終了しました。

参加者からは「普段交流の機会がない方と知り合いになれてよかった」「子育て中または経験者の方に有意義なアドバイスをいただいた」等のご意見をいただきました。女子学生の方にとっても将来の働き方を考えるよい機会になったようです。これをきっかけに女性教職員・学生のネットワークがさらに広がることを期待しています。また、今回は男性参加者は少なめでしたが、今後は男性にも交流の輪に加わっていただけるような企画も考えていきたいと思っております。



平成25年度～平成27年度 文部科学省女性研究者研究活動支援事業 「まゆだまプラン」から新たなステージへ！

女性研究者研究活動支援事業から 全学の男女共同参画推進へ

本学が3年間取り組んできた女性研究者研究活動支援事業「まゆだまプラン」も3月で終了します。

この間、女性研究者の研究環境の改善に努めた結果、女性研究者比率は確実に増加し、「まゆだま広場」を中心とする活動が国立大学法人評価で「注目される事項」として取り上げられるなど多くの実績を上げました。事業期間終了後も、男女共同参画推進室は、中長期の視野に立ち、「国立大学法人群馬大学男女共同参画推進基本計画」に基づき、全学の男女共同参画を推進し、平成28年度から始まる群馬大学第3期中期目標・計画達成に貢献してまいります。

平成28年度からは、「女性の職業生活における活躍の推進に関する法律（女性活躍推進法）」も施行されます。女性研究者に限らず、女性も男性も、家庭と仕事との両立が可能な職場環境や働き方の改善が一層求められることとなります。

アンケートやランチミーティング等の交流の場で、皆様から寄せられた声に応え、学内の男女共同参画を推進していくために、「まゆだまプラン」での成果を精査し、新たに「まゆだまプランプラス(仮称)」構想を計画中です。

今後、男女共同参画推進室の活動にご協力をお願いいたします。

各ワーキンググループの 主な取組（H27.12現在）

○支援体制・環境整備WG

- ・「くるみん」の取得
- ・各キャンパス「まゆだま広場」の開設
- ・研究活動支援者の配置
- ・両立支援アドバイザーの配置
- ・「まゆだまカフェ」の開催
- ・「まゆだまスクール」の開催

○広報・ネットワーキングWG

- ・研究科長等へのインタビュー
- ・まゆだま通信（9号発行）
- ・まゆだま情報Clip（16号発行）
- ・学内アンケート実施（3回）

○意識啓発WG

- ・男女共同参画に関する講演会
- ・まゆだまランチミーティング
- ・研究力アップ講座
- ・オープンキャンパスへの参加
- ・女子学生向け大学院説明会
- ・シンポジウムの開催（3回）
- ・全学教養科目授業実施



まゆだま広場

利用者 延べ1832人

事業期間中の男女共同参画推進室 「まゆだま広場」の活動

(平成27年12月末現在)

男女共同参画推進室員メンター

相談件数 延べ55件
(グループ相談含む)

両立支援アドバイザー

相談件数 延べ194件
まゆだま情報Clip16回発行



研究活動支援者

利用者36名・支援者64名

意識啓発・情報発信

シンポジウム 延べ469名参加
ニュースレター 9回発行
ホームページ開設
<http://kyodo-sankaku.gunma-u.ac.jp/>

まゆだまランチミーティング

23回開催 延べ454名参加

メンター相談「シルクネットワーク」* 室員メンターとコーディネーターと一緒に相談に応じます。

保健学研究科長インタビュー ～男女共同参画を語る～

インタビューー 村上 博和 保健学研究科長
インタビューアー 永井 弥生 男女共同参画推進室副室長
嶋田 淳子 男女共同参画推進室員
長安めぐみ 男女共同参画推進室講師



保健学研究科における男女共同参画の取組について

嶋田：保健学研究科は女性教員が50%以上ですが、男女共同参画の活動についてどのように感じていらっしゃいますか。

村上：本当にアクティブにしっかり活動されていると思いますね。まゆだま通信も必ず回って来ますし、皆さんに推進室の活動はかなり周知されているのではないですか。また、研究支援のサポート制度も非常にいい試みだと僕は思っています。

永井：研究科として「こういうところをしっかりとやりたい」というところはありますか。

村上：研究ですかね。保健学科は教育デューティーが多く、助教に非常に負担がかかっています。実習に時間がとられ研究が夜にしかできないことが多いので、昼間の研究時間を確保できるようにしなければいけないとは思っているのですが。

長安：ちょうど助教の方は子育て期に当たりますね。

村上：産休・育休に関してはしっかり取ることができて、代わりに教員が来ていただけるので、その点は大丈夫になりました。

昔に比べると、男性側の理解もだいぶ変わっているのではないのでしょうか。一生懸命やっている方がくすぶっては仕方がないので、会議や行事などに関してはなるべく簡略化してさらに全体でカバーし合うような形にした方がいいと思います。



嶋田：女性研究者のレベルアップという点で何か取組がありますか。

村上：保健学研究科はミッションの再定義で研究者・教育者を作ることを目標として、研究をする大学に位置づけられています。これは女性だけではないのです

が、毎年英文論文を1編以上書けば研究費補助というシステムを作っています。

永井：先生は個人的には、男性の家庭への関わり方や、育児への参画など、どのようにお考えですか。

村上：僕は古い人間だったので（笑）、子供の出産のときに休むなど、もつてのほかだと思っていました（笑）。今は、男性も、働きやすく、休みやすくなったかと思っています。

保健学研究科の学生への期待

長安：保健学科の女子学生の皆さんは非常に積極的な印象があります。

村上：自分たちが指導者にならなければいけないと思う学生たちが、それなりの比率を占めていますので、その点ありがたいです。今後、彼らが日本を引っ張っていくのではないかと考えています。うちの出身者で教育者・研究者になった方がたくさんいますので、もっと増やしていければと思います。

長安：大学院進学につなげていくようなことが、大切だということですね。

村上：そうですね。大学院に行くことを強く勧めています。自分の職種における確かな知識と技術を持ち、それに基づいた、しっかりした発言能力を持たないとだめだと思います。保健学の分野は、後発の学問なので、まだまだ研究者・指導者が少ないのですが、本学には、しっかりした先生方がいらっしゃるの、よいロールモデルになると思います。

嶋田：最後に、今後の抱負についてお聞かせ下さい。

村上：女性の研究者・教育者をしっかり育成し、それに基づき女性の発言力や活動範囲が広がれば、当然男性も、同等に家庭内の仕事をできるようになりますので、女性と男性が同じような職場環境、家庭環境で過ごせるようになると思います。地道なところからの努力で、まず研究をし、業績を上げ、女性教員、女性医療人の発言力や行動範囲、活動範囲を広げ、それを一般社会に広げていくことが大切だと思います。

永井・嶋田・長安：ありがとうございました。